令和３年度
北海道教育大学
附属函館幼稚園だより
NO．１４【号】

幼児期の感性への働きかけ

附属函館幼稚園園長　外崎紅馬

今年度、お誕生会で「園長先生の紙芝居」を新たに始めることとした。そうはいっても、園児の前で紙芝居を実際に実演できたのは今のところ４～５回しかない。コロナの猛威に対抗するべくその感染対策として、お誕生会を遊戯室で実施せず事前に撮影した動画を各保育室で視聴するという方法に切り替えたからである。私の紙芝居も、撮影してくれる園の先生のカメラに向かって行い、それを視聴用の動画に加えてもらっている。

その動画であるが、音声については撮影機器に内蔵されている録音機能を利用しているため、いまいち音がクリアではない。保育室で園児と一緒に視聴していたところ、声が聞き取りにくかったり、聞こえなかったりというのがネックに感じられた。紙芝居で、ところどころ声が聞こえないと、きちんと言葉が届かず、園児たちの「言葉」に対する興味や関心を半減させてしまいかねない。

そこで、動画の音声についてのネックをどうにかしたいと思い、「言葉」ではなく、「音」そのものを伝えてみてはどうかと考えた。「言の葉」ならぬ「音の葉」である。私事で恐縮だが、５～６年前、私はヤ●ハ大人の音楽教室に通い、クラリネットを練習していたことがある。学生時代に吹奏楽部だったというわけでもないので未熟ではあるが、紙芝居をクラリネット演奏に代えて、園児には音楽に親しみ、音によるイメージを豊かにしてもらおうというねらいを新たに立てた。

どのような曲を演奏すれば園児は楽しめるのか。ピアノで伴奏をしてくれる先生と相談し、ジブリ映画の曲を当面は選曲することとした。早速「となりのトトロ」の演奏動画を撮り、それをお誕生会のときに保育室で園児と共に視聴したところ、音声の聞き取りにくさは解消された。さらに嬉しいことに「となりのトトロ」を知っている園児が、私の演奏に合わせて　♪となりのトットロ～　トットォ～ロ～♪と歌いだした。
私のつたない演奏でも、幼児の「表現」する意欲の一助となったようで幸いである。